

# ローカリストの時代

Localist

## 住民と医療・介護結ぶ

横浜で訪問看護・ケアマネ 栗原美穂子さん(49)

横浜市鶴見区医師会の栗原美穂子さん(49)は、訪問看護師でケアマネジャーです。「かかりつけ医を紹介してほしい」「医師の説明が難しくよくわからない」といった電話相談に応じて地域を回り、住民たちと医療・介護をつなげています。

7月下旬、栗原さんが区内の矢野和子さん(70)宅を訪ねた。母美枝さん(92)が10年ほど前から心臓を患い、近くの診療所に通っている。いまは元気だが、最期は自宅で迎えたいと考えている。

矢野さん親子は診療所で、必要な「心構えと準備」について主治医の説明を受けたが、よくわからなかった。主治医に紹介されて電話した医師会の「さわやか相談室」で対応したのが栗原さんだった。

2度の訪問で、美枝さんの病状が今後、どんな経過をたどり、どう対応したらいいのかを説明した。たとえば「息切れが強くなったら往診を頼む」といったことだ。これまで使っていたなかった介護保険サービスの利用も勧め、訪問看護を受けてもらうことにした。

「何かあったときは訪問看護ステーションが24時間対応してくれることがわかって安心しました」と和子さんは言った。

さわやか相談室は2012年、「医療・介護と住民をつなげたい」という思いから、栗原さんが中心になって開設した。栗原さんら2人が看護師としての知識と介護保険の利用を支援するケアマネとしての知見を生かして相談に応じている。

強みは、区内に約1500人いる開業医をはじめ、「地域資源」を知りつくしていること

だ。医師を紹介するときは、相談者との相性も考える。「この人には、自宅から少し遠くても、人当たりが良い先生の方がいいかなどか。データを求める人には、細かい説明を面倒がらない先生を紹介します」

かつて東京の総合病院で看護師として勤務した。末期がんの患者が自宅に帰ることで元気を取り戻す姿を見て、在宅医療の必要性を痛感した。医師会の訪問看護ステーションに入ったのは1996年。3年後、ケアマネ資格を取得した。

00年に介護保険制度が導入されて、在宅医療・介護の環境は

大きく変わった。利用できるサービスが大幅に増え、選択肢から選べない人も増えた。だからこそコミュニケーションを大切に。大事なものは相手の理解を確認しながら説明していくことです。

5年前に立ち上げた「つるみ在宅ケアネットワーク」には地域の医療、介護に関わるメンバーが参加する。「顔の見える関係」を作ることが狙いで、毎月のように多職種での勉強会を開いている。

栗原さんはいまも地域を回りながら、訪問看護ステーション3カ所と介護支援ステーション1カ所所長たる医師会在宅部門の総括責任者を務める。医療・介護の知識があり、病院、診療所や患者会といった情報を知り尽くしたスタッフはまだ少ない。「地域をよく知る後進を育てていくことが、これからの私の大切な役目の一つだと思っています」と話す。

### \*取材を終えて\* 地域を知る強み

「10年来のつきあいのある私ではなく、『一見』の栗原さんの説明の方がわかりやすいなんて」。美枝さんの主治医、山本慎吾さん(50)は苦笑する。ただ、月約千人の患者を診るなか、何時間もかけて終末期医療の説明をすることは難しいのも事実だ。「栗原さんのような人はこれから地域にもっと必要になる」と語る。

栗原さんが地域を良く知るのは、約20年に及ぶ訪問看護に広がってほしい。(斎藤博美)

◆ご意見や情報をお寄せください。ファクスは(03・5566・0000)、メールはlocalist-jidai@asahi.com。



矢野さん親子を訪問する栗原美穂子さん(右)＝横浜市鶴見区、天田充佳撮影